

1 運営形態について

1. 小中学校の運営形態に関する意見

- ・小中併設校への賛成と小中併設を希望する意見が多い。
- ・校舎の境目をなくした上での子ども達、職員の交流促進。
- ・建築費の削減のためにも小中併設。
- ・義務教育学校への賛成。
- ・経費削減や運営効率化の観点から賛成。
- ・PTA の統合や入卒業式の負担軽減を評価。
- ・教頭や教職員の負担増加に懸念もあり。
- ・教職員の働き方改革や報酬の充実を求める意見。
- ・現在の運営形態の良さを継続したいという意見。

2. 教育内容・方法に関する意見

- ・イエナプラン教育、モンテッソーリ、シュタイナー教育に関心。
- ・地域産業を活かした授業や、知識を実生活に活かす学びを希望。
- ・学ぶべきことを経験させる教育方法に期待。

3. 村の未来像と地域性

- ・少子化に伴う教育環境の課題。
- ・学校運営形態（義務教育学校、小中併設校）の選択肢の詳細をもっと知りたいとの要望。
- ・村全体で学校環境をより良くする取り組みの必要性。

4. 子ども達の視点

- ・子ども達の意見を尊重すべきとの意見。
- ・子ども達たちへの影響を第一に考えることが重要。

(まとめ)

- ①小中併設校 vs 義務教育学校のメリット・デメリットの洗い出し
- ②教職員や教育専門家からの意見を聞く機会の設定
- ③子ども達や保護者を含めた議論を行い、具体的なプランの検討

2 校舎のあり方について

1. 現在の課題の把握…… 老朽化 安全性 予算考慮

- ・現在の小中学校の校舎が老朽化しているため、改修または建て替えが必要。
- ・現在の立地が土石流警戒区域や浸水想定区域に位置しており、災害リスクへの対応が急務。
- ・少子化が進む中、持続可能性や予算の制約を考慮する必要がある。

2. 統合の方向性に関する選択肢…… 新築 既存校舎改築

- ・新たに安全な場所で校舎を建設。
- ・地域材を活用した木造校舎の提案や、著名人への設計依頼。
- ・教室や施設の効率的利用を考慮した必要最低限な設計。
- ・小学校や中学校の現校舎を大規模改修して活用。
- ・一部の校舎を利用し、他施設との併用を検討。

3. 立地の検討基準…… 災害リスク アクセスの利便性 村の将来を見据えた立地

- ・土石流警戒区域や浸水想定区域を避け、安全性を最優先。
- ・通学路や親の送迎の利便性を考慮。
- ・文化・教育・保育機能を集約し、新たな村の拠点を形成。
- ・高齢者向け住居の整備や住民との交流を促進。

4. 村全体の生活の統合的改善…… 村全体の福祉公共性 エネルギー視点

- ・学校と地域機能（図書館、公民館）の併設。
- ・学校を地域活性化の核とし、子どもと高齢者が共存できるエリア構築。
- ・環境負荷低減・エネルギー効率化を進める住環境づくり。

5. 新しい学校づくりへの期待…… 住民が関われるプロジェクト

- ・地元住民が主体的に参加するプロジェクトの観点で推進。
- ・耐用年数を見据えた柔軟な施設設計。

（まとめ）

- ①課題
- ②選択肢
- ③基準
- ④村全体の目標
- ⑤住民参加

3 学びのあり方について

1. 個別最適な学びと協働的な学び

- ・児童生徒の特性に応じ、個別対応を主体にした学びの提供。
- ・自由進度学習や多様な学びを支えるための施設、空間設計。
- ・協働的な学び（課題解決型、プロジェクト型を主とした学習）。
- ・対話を通じた学び。

2. 子どもの主体性を引き出す教育

- ・自分で課題を発見し解決する力を養う教育や学習活動。
- ・「探究的な学び」の導入とその環境整備。
- ・自由な発言発信の奨励と、問に応答、反応する能力を向上させる学習。

3. 地域資源との連携と活用

- ・地域住民との交流を促進する学習形態の設計。
- ・地域資源（農業、自然、歴史資産、文化施設など）のフル活用。
- ・地域の専門家による学習支援や学校に招いての課外授業や体験型学習。

4. 少人数教育の強みを活かした手厚い指導

- ・児童生徒一人ひとりに寄り添った教育の実施。
- ・少人数制のクラスで、きめ細やかな指導を可能にする教育。
- ・苦手な部分を重点的にサポートする授業の態勢づくりやデザイン。

5. 社会体育としての部活動のあり方

- ・広域連携による選択肢の拡大（近隣地域との連携）。
- ・部活地域移行に向けた負担軽減策（送迎の仕組み整備など）。
- ・子どもが希望する部活動の支援と専門的指導の提供。
- ・部活動における総合型スポーツクラブの役割の確立。

6. 子どもが興味・関心を持つ環境づくり

- ・プログラミング、英会話など未来を見据えた学びの導入。
- ・児童生徒が意欲的に学びたくなる授業の工夫。
- ・先行事例の学校形態を参考にした自由な学び空間のデザイン。

7. 高校進学・将来を見据えた学び

- ・木曽地域の学力向上に向けた学びの質の改善。
- ・進学や受験対策の手厚いサポート。
- ・英語やパソコンなど、グローバル社会で有益なスキルの育成。

（提案）

「学びのあり方」について、以上のような柱を基に議論を進めたい。
議論の目的は「学びのあり方」について具体的で実効性のある方向性を見出すこと。

4 （自由記述）のまとめ

1. PTA や委員会の改善提案

- PTA の見直し、不要な場合でも運営できる体制を構築。
- 検討委員会のメンバー構成に関する懸念。
- 保育園以下の保護者などの意見を広く募集。
- 委員会の透明性と周知を徹底する必要性。

2. 部活動の見直しと多様化

- 中学校の部活動の選択肢を広げ子どものポテンシャルを最大限に引き出すために、体協やスポーツクラブ、習い事の活用を検討。
- 人数不足を考慮した個人競技や文化部のクラブ活動の導入。

3. 地域との連携と村民の参画

- 子どもを持つ家庭だけでなく、村民全体からの意見を聞き、村の財源活用への理解と協力を得る。
- 自然豊かな地域資源を活かした教育の場を提供。

4. 未来志向の教育と子ども主体の学び

- 子どもが希望や夢を持てるような学びの場を提供。
- 子どもの意見を重視し、自由進度学習や自分らしさを大切にした教育を推進。

5. 統合学校形態の具体案と情報共有の改善

- 義務教育学校や併設校の具体例を挙げて保護者に選択肢を提示。
- 定期的な報告や議事録の公開による情報共有の強化。

6. 教育環境の改善提案

- 卒業式や校舎の分離など、適切な学年別運営形態を模索。
- ランドセルの改善や、現代に適した学用品の導入。